SPRING & SUMMER 2021

# 雪椿通信

vol.54

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

横山操〈TOKYO〉1968年

## コレクション展示室より

### “ものがたり”をめぐって

物語―それは特別なものではなく、日常の至る所に転がっているものかも知れません。美術作品にも、ひとつひとつに物語がついているのだと思います。一見物語とは関係のなさそうな作品にも、それを描こうと思った作者の心の動き、その色や形や技法にも、小さな物語があるのではないでしょうか。

さて、物語をテーマに作品を選ぼうとするとき、まず思い浮かぶのは、既存の物語を絵に描いたものでしょう。中でも、おそらく最も古いものは、宗教を多くの人に広めるための、釈迦やキリストの物語ではないでしょうか。日本最古の絵巻である「絵因果経」は、経典の下半分に書かれた経文の意味を上半分に絵で描いたもので、それは、釈迦の生涯と前世の物語をわかりやすく伝えます。日本の古いお寺には「○○縁起」といった、由来を絵に描いたものが多く残っており、絵は、誰もがその内容を理解できるものとして、信仰を広めていくのにとても有効な手段だったのでしょう。

伝説や神話を描いたものには、情報の普及とはまた別の役割がありそうです。当館の所蔵品、竹内蘆風の《武陵桃源之図》は、中国の詩人陶淵明が書いた理想郷の物語を具体的な画像に表したものです。言葉だけの世界を絵に表すことで、イメージがより鮮明に立ち上がり、物語の世界をより深く味わえることになります。

このたび、コレクション展で「“ものがたり”をめぐって」と題した展覧会を実施しますが、ここでは上記のように物語を描いたもののほか、絵巻や絵本原画、背後に興味深い物語のある作品や、物語を感じさせる作品など幅広く展示いたします。（専門学芸員　宮下東子）

竹内蘆風〈武陵桃源之図〉1928年

### 1920年代の美術―暗闇と光が交わるとき

100年前の時代に思いをめぐらせて、当時の社会の様相に目を凝らし、人々の心の声に耳を澄ませてみたい―　今年12月から予定している特集展示では、当館の所蔵品のなかから1920年代に制作された絵画や版画を選び出し、再検証してみたいと思います。地域としては日本とドイツが中心となります。歴史は繰り返すというフレーズを単純にあてはめることはできませんが、現在直面している新型コロナウイルス禍は、20世紀初頭のスペイン風邪流行に幾度となくたとえられています。それは100年というタイムスパンで事物を再考することにより、時代を貫いて形を結ぶ「本質的な何か」が見出せると思うからではないでしょうか。今日を生き抜くための希望を得たいという私たちの願いも込められているのでしょう。

ドイツの版画家・彫刻家ケーテ・コルヴィッツ（1867-1945）は、9年という歳月をかけて木版画集《戦争》を完成させています。直接的な制作の動機となったのは、作者の次男ペーターが第一次世界大戦中に兵士として出征し、18歳の若さでその生涯を終えたというつらい体験です。息子を亡くした母親としての深い悲しみから、仕事を前に進めることは困難を極めたといいます。しかし造形にかけた長い道のりのなかで、苦しみは次第に平和のためにたたかう強い意志へと変化していきました。光と闇の劇的な交錯や激しい刻線を特徴とする木版画に、戦争を告発する芸術が結晶しています。こうした作品を通して、時には倒れ、あるいは立ち止まり、暗闇の意味をかみしめる時間をもってもよいのではないでしょうか。（専門学芸員　平石昌子）

ケーテ・コルヴィッツ『戦争』（6.両親）1921／22年

### 表紙の作品

横山操〈TOKYO〉1968年

1958年に設立された東京タワーは、当時世界一高い自立式鉄塔とされ、現在のような高層ビルもない時代に巨大な鉄塔が天に向かってそびえ立つ様は、急速に豊かな時代へ向かう日本の象徴のようでもありました。その後開催された東京オリンピックを契機に、新幹線や高速道路など交通網が大規模に整備され、東京の街は大きく変貌を遂げていきます。

作者は完成したばかりの首都高をハイヤーで何度も巡って取材し、この新しく生まれかわった「東京」を、東京タワーを中心に眼下を密集したビル群がどこまでも広がる光景として描きました。闇に沈んだような街並みからは人々の喧噪は感じられず、どこか空疎な印象で、静まりかえった街を見下ろす巨大な塔はどこか孤独な人の姿のようにも見えます。変わりゆく東京の姿を見つめ、作者はその胸中に何を思ったのでしょうか。（主任学芸員　伊澤朋美）

## 退任あいさつ

平成29年（2017）4月、近代美術館館長の辞令をいただき着任しました。着任翌日、長岡造形大学の入学式に同大学教育研究審議委員として出席、次の日は姉妹館・県立万代島美術館で6月に開催される「レオナール・フジタ展」の実行委員会に出席しました。実行委員会の2日後、東京・お台場にある日本科学未来館で開かれた「ディズニー・アート展」開場式に、朝早い新幹線で出かけました。事情がよく呑み込めていない中、いきなりトップギアで走り出したのを懐かしく思い出します。

この年の企画展は、4月「漢字三千年展」、7月「加山又造展」、9月「萬鐵五郎展」、12月「堀口大學展」、年明け2月から「ディズニー・アート展」というあわただしさ。このころ3密という言葉はなく、多くの入館者でにぎわいました。

翌平成30年（2018）は改修の年。「白寿　江口草玄のすべて」が閉幕すると休館に入りました。お休みの期間はおよそ1年2カ月に及びました。メインの工事は美術館の心臓部に当たる空調機器の更新。貴重な美術作品を守り、次の世代へしっかり受け継いでいくために不可欠の改修でした。

改修工事中に元号が改まった令和元年（2019）9月、待ちに待ったリニューアル・オープン記念「新潟の美術展」を開催しました。10月には「PIXAR のひみつ」展を開催し県内外から7万人を超える入館者をお迎えしました。

ビクサー展で大いに盛り上がり、さらに県民の皆さまに楽しんでいただこうと意気込んでスタートした令和2年（2020）。年明け早々、新型コロナウイルスが県内でも感染の広がりをみせたため、開催中の「1964　東京―新潟展」が途中で打ち切り。4月に開幕した「ウィリアム・モリスと英国の壁紙展」も中断を繰り返すといった対応を迫られたほか、密が予想されるとして中止を決めた企画展もありました。

それから1年余り。コロナ禍、感染防止を徹底するため鑑賞していただくスタイルが変わりました。生活様式はコロナ以前と比べものにならないほど大きく変わってしまいました。

先日、新聞の投書欄に「県立近代美術館に出掛けた。ここには好きな印象派の作品や日本絵画があり、すっぽり空いた心の穴を埋めてくれた。その後、近場の美術館へ行くようになってから体調も良くなった」というご意見を拝見し勇気づけられました。生活や社会のスタイルは変わっても、美術館に寄せられる期待は変わっていないと感じました。それだけに美術館の使命、役割はコロナ禍の今こそ、いっそう大きくなると改めて感じています。長い間お世話になりました。（前館長　木村哲郎）

鈴木力〈聖者の街 '89 アッシジ〉1989年

3月末をもって木村哲郎は退任し、4月1日より遠藤聡が新館長に着任いたしました。

## 編集部からのひとこと

前号53号は、校了直後に特集していた三沢厚彦展の延期（予定）が決定したため、発行をとりやめ WEB 上のみでの公開となりました。昨年度から1年1回発行となっていた状況も重なり、今号は2年ぶりの発行です。少しずついつもの美術館に戻れますよう。（主任学芸員　松本奈穂子）

新潟県立近代美術館だより　雪椿通信　第54号
編集・発行　THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館
〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL0258-28-4111代　FAX0258-28-4115
https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/
公式ツイッター／インスタグラム　niigata_kinbi
制作・印刷　株式会社 山田写真製版所
〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14
リデザイン　長岡造形大学 太田朝陽、畔上祐香、大浦有夏、田中雄大
発行日　2021年4月23日

特集　御大典記念 特別展

# よみがえる正倉院宝物
## ―再現模造にみる天平の技―

正倉院正倉外観

正倉院宝物とは、奈良・東大寺の倉であった正倉院正倉に伝えられた約9000件におよぶ品々です。聖武天皇ゆかりの品をはじめ、その多くが奈良時代の作で、天平文化華やかなりし当時の東西交流もうかがい知ることができます。しかし、約1300年を経て今日にいたる正倉院宝物は、きわめて脆弱であるため、毎年秋に奈良で開催される「正倉院展」で一部が展覧される以外はほとんど公開されてきませんでした。

より多くの人に正倉院宝物の魅力を伝え、その卓越した技術を後世に伝承することを目的として、正倉院宝物の当初の姿を再現する模造製作が明治時代から始められました。昭和47年（1972）からは宝物を管理する宮内庁正倉院事務所によって、宝物の材料や技法、構造までを忠実に再現する本格的な模造事業が行われています。見た目だけでなく、内部まで忠実に再現された作品は、単なる模造ではなく、高い芸術性と学術性を併せ持つ究極の伝統工芸品であるといえます。

本展は、天皇陛下の御即位をはじめとする皇室の御慶事を記念し、これまでに製作された数百点におよぶ再現模造作品のなかから、選りすぐりの逸品を一堂に集めて公開するものです。

その展示品中「銀薫炉」は、平成22年（2010）重要無形文化財保持者「鍛金」に認定された燕市在住の玉川宣夫氏と、同じく燕市在住の彫刻家市川正美氏の両者によって再現されました。

この作品の原宝物は、光明皇后が東大寺大仏に献納した際の目録『東大寺献物帳（屏風花氈等帳）』に「銀薫炉壹合」と記載されているものに当たり、聖武天皇御遺愛品であることが知られています。

純度の高い銀を用いて、全面に透彫を施した球形の香炉で、衣などを被せて香を焚き込めたものと考えられます。中国でも小型の類品が出土しています。

銀鍛造製で、内外面ともに轆轤挽きで仕上げられ、表面には8世紀唐代に流行した宝相華唐草文の地に、獅子と鳳凰を交互に配した文様を毛彫りし、間地を切り透かしています。赤道に相当する部分で上下に分かれ、下半分の内側に鉄製の火皿を備えています。火皿は回転軸の違う三重の輪により、転がっても常に水平を保つ仕組みとなっています。

上下の合口にも工夫があり、口縁につくり出した凹凸の噛み合わせにより、左右にねじることで開閉します。そして開閉の目印に、合口をまたいで「合」字が刻まれています。

原宝物は下半分が明治30年（1897）の作であり、火皿や三重輪のうち二枚も後補されたものです。この模造では、当初の形状を生かし、前述の巧妙な仕掛けが再現されています。

再現された天平の美と技に触れていただくとともに、日本の伝統技術を継承することの意義も感じていただきたいと思います。

（専門学芸員　松矢国憲）

模造 銀薫炉（ぎんのくんろ）　平成13年（2001）

特集　スタジオジブリ × 新潟県立近代美術館

# 「高畑勲展 日本のアニメーションに遺したもの」に向かって

当館とスタジオジブリとの出会いは2011年に遡ります。「借りぐらしのアリエッティ×種田陽平展」（2011.11.3-2012.1.15）がその最初の展覧会でした。本展は2部構成で、前半を宮崎駿企画・米田宏昌監督作品「借りぐらしのアリエッティ」のミニチュア世界を鑑賞者が実体験できる形で再現し、後半はクエンティン・タランティーノや三谷幸喜監督作品などに美術監督として参加した種田陽平氏の映画美術を紹介するというものです。

もともと東京都現代美術館で開催された展覧会でしたが、当初は巡回する予定はなく、というより物理的に巡回出来るような規模ではありませんでした。なぜなら、本展の展示物を移動すると4トントラックでおよそ80台分が必要だったからです。その展覧会が様々な変遷を経て当館にオファーされました。当然、規模の大きさからお断りしようとしたところ、当時の徳永健一館長（在籍2008-16）はこういった展覧会こそ、美術館ファンの裾野を拡げる効果があると大英断し、開催が決まったのです。

開催年となり、初代館長を顕彰する「美の軌跡・前川誠郎の美学」展（2011.9.3-10.10）の会期中に、4トントラック77台分にも及ぶ展示物が到着しました。バックヤードのあらゆる場所を使用しましたが、それだけでは足りず、近隣施設を借りてようやくというボリュームでした。いよいよ展覧会がはじまると、長岡の冬期という不利な会期であったにも関わらず、毎日、多くの来館者があり最終的には175,686人という、開館以来最大の入館者数を記録することになりました。

本展を開催してわかったことは、当館はどんな大規模な展覧会でも対応できるという点でした。10トントラックも難なく搬入口に入れる、搬入口から企画展示室まで全て同一フロアにあり一直線で行ける等々、展示スタッフの方からは展示し易い会場であることも伺いました。以降、同傾向の展覧会を縮小することなく、むしろ他会場より拡大して開催することもできました。その最大のものが「ジブリの大博覧会」（2016.3.5-5.15）です。本展では「思い出のマーニー×種田陽平展」と「ジブリの大博覧会」と言う2本の展覧会を同時開催したのです。本展の入館者数は182,417人となり、それまでの記録を更新、現在もこの記録は破られていません。

かぐや姫の物語
©2013徳間書店・Studio Ghibli・NDHDMTK

さて、今年、スタジオジブリを象徴する一人であり、1960年代から半世紀にわたって日本のアニメーションを牽引し続けたアニメーション監督、高畑勲（1935-2018）の回顧展を開催します。本展は2019年に東京国立近代美術館（7.2-10.6）から始まった展覧会ですが、当館の特色を生かして、本展の新しい表情を見せつつ、ご期待にそえるような形で高畑勲の多方面な作品世界を紹介していきたいと考えています。未見の方も、そして他会場でご覧になった方なも、あらためてお楽しみに。

（学芸課長　藤田裕彦）

企画展　御大典記念 特別展 よみがえる正倉院宝物―再現模造にみる天平の技―
7月3日(金)～8月29日(日)

企画展　高畑勲展 ―日本のアニメーションに遺したもの
9月18日(金)～11月14日(日)　※会期は10月31日までから変更になりました。

特集　新型コロナ禍の美術館①

# レポート：コロナ禍での展覧会準備

本年3月20日より「Viva Video! 久保田成子展」が開幕します。本展は10年以上前から企画されていましたが、様々な事情からなかなか実現できず、3年程前に国内3館での巡回展として開催の目処が立ち、ようやく本格的な準備が始まりました。その只中で新型コロナウイルスが流行し、再び開催が危ぶまれましたが、これまでの調査や関係者の方々のご協力、そして何より展覧会を楽しみにされていた故・久保田成子氏ご本人の期待に応えるべく、様々な助成金を取得するなどして、なんとか開催にこぎ着けました。

しかしながら、未知のウイルスの脅威にさらされながらの展覧会準備は予想以上に困難を極めます。作品の主要な借用先である久保田成子ヴィデオ・アート財団はニューヨークにあり、日本とは比べものにならないほど新型コロナウイルスの感染者・死者が増加していた首都はロックダウン。作品の修復や貸し出しのための準備作業は中断せざるを得ませんでした。そして、ようやく活動できるようになった夏頃から準備を再開してくださったものの、ドイツ在住の財団のアート・ディレクターは渡航できず、アメリカ在住の3名で進めることになります。ロックダウンが解除されたとはいえ、依然ウイルスの脅威に晒されながらの短期間での準備作業は多くの精神的・肉体的な負担を強いることとなり、それを遂行してくださった財団の皆さまには感謝と敬意の念しかありません。

作品貸出の準備が何とか完了してからも、作品を輸送するための航空便はコロナの影響で減便、また彫刻作品を輸送する船便は中国の輸出増加の煽りで輸送費が高騰するなど、多くの困難が立ちはだかりました。そのため、展示開始の1、2週間前になっても予定通り到着するか確定されず、結果的に展示開始初日にどうにか通関手続きが完了するという、ハラハラの日々が続きました。

一方で、巡回館での準備作業も通常のように集まることはできず、全てメールとオンラインで行うことになり、往復するメールの数は毎日100通を超えました。

オンライン設置作業の様子

そして、一番の懸案であった展示作業についても、アメリカから展示指導に来ていただくことができないため、オンラインで行うことになりました。一般的な美術展のような絵画や彫刻作品であれば作品の状態と展示位置を確認して設置するだけのため、オンラインでもそれほど難しくはないと想像されますが、本展出品作品のほとんどが複雑な構造の立体部分を組み立て、さらに映像を設置し、全体をプロジェクションするなどといったインスタレーションとしての要素が強いため、オンラインでの説明は簡単ではありません。また、担当者も初めて実見する作品も多くあり、写真と財団からの指示をもとに設置を進めるしかありませんでした。そのような中でも、地元の造作業者をはじめ、東京から映像作品の設置を手伝いに来てくれた専門チームの皆さまのおかげで、なんとかここまで設置作業が無事に進んでいます。

コロナ禍という非日常的な展覧会準備を経て進められた本展がどのような形で実現したのか、皆さまの目で実際に確かめていただければ幸いです。

（主任学芸員　濱田真由美）

※本稿は展示作業中の3月16日に執筆しました。

特集　新型コロナ禍の美術館②

# （オンラインで）美術館をもっと楽しむ

新型コロナウイルス感染症の脅威は、昨年5月末に閉幕した「サンダーソンアーカイブ　ウィリアム・モリスと英国の壁紙展」以後、約10ヶ月にわたって企画展が開催されないという、当館開館以来、前代未聞の事態を招きました。これまで当館では、おそらく他の多くの美術館同様、大多数を占める方々が企画展を目的に来館されていたので、これはまさに危機的な状況です。一方で、この状況からこれまで華やかな企画展の陰に隠れがちだったコレクション展について再考し、コレクションの魅力をアピールするチャンスを見出すことにもつながるのではないか。そうして試行錯誤の末たどり着いたものの1つが、「美術館を“もっと”楽しむ！」というウェブサイト上での取り組みでした。もともとは、ウイルス流行当初、休館を余儀なくされていたときに他館の見よう見まねで始めたものですが、現在は、コレクションの発信を中心に、学芸員が1点を取りあげて深掘りするエッセイや、ワークシートを新たに作って掲載しています。これまでは美術館に来館しないと、さらにそこでコレクション展をご覧いただかないと、なかなか知っていただく機会のなかったコレクションについて、少しずつファンが増えていくことを願いながら、今後も地道な更新を続けていく予定です。

（新潟県立万代島美術館主任学芸員　松本奈穂子）

### ツイッター担当の日々

4月末、コロナ禍により、開催中だった企画展の期間縮小や夏の企画展の延期を余儀なくされました。「Stay home」が叫ばれ、人々の往来が消えました。美術館もピンチです。

『近代美術館に来たくても来られない人に、Web で美術館を楽しんでもらいたい！』この願いが「ツイッター 所蔵品紹介」の原点となり、スタートしました。

6月から毎週水曜日、9人の学芸員が、決まったテーマで収蔵品を紹介することが決まりました。父の日にちなんで「家族」、クリスマスにちなんで「人に贈りたい作品」等です。

9人の学芸員で1年間つないだリレーは計58点です。昨年度3月末で終了しました。

今年度は新たな企画でツイッターを盛り上げています。ぜひご覧ください！

（前副参事　山本未知雄）